

キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響

Camp Experience and its positive impacts on quality teaching in nature-oriented experience programs : A study targeted for students pursuing a profession in teaching

青木 康太朗¹⁾ 粥川 道子¹⁾

Kotaro AOKI Michiko KAYUKAWA

キーワード：キャンプ体験，教員養成課程，自然体験活動，指導力，教育効果

I. 緒 言

近年，青少年の自然体験や生活体験等の体験不足が指摘されるなか，教育に関する法令や答申等では，青少年の豊かな人間性や社会性をはぐくむため，学校教育や社会教育において自然体験を始めとした様々な体験活動の充実を求めている。文部科学省は，体験活動の充実を図る一つの方策として，平成20年度より「青少年体験活動総合プラン～小学校長期自然体験活動支援プロジェクト」¹⁾を実施し，その一環として小学校が実施する長期自然体験活動を支援する指導者の養成に取り組んでいる。しかし，実際には養成した指導者が自然体験活動の企画や指導を行っている事例は少なく，多くの学校では教員がその役割を担っているのが現状である。こうした現状を鑑みると，今後，学校教育において自然体験活動の充実を図るためには，教員自身が自然体験活動の意義や重要性を理解し，その基礎的な指導技術を身につけておくことが必要になる。

しかし，今日に至っては，青少年だけではなく，教員を目指す学生や教員自身の体験不足を指摘する声もあり²⁾，教員養成や教員研修等において自然体験活動の指導に必要な資質能力を身につけさせることは重要な課題になっている³⁾。教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（平成14年7月）では，教職課程における効果的な教育方法の導入として「自然体験等に係る体験的実習を重視する必要がある」と述べたうえで，「教員を志願する者の豊かな人間性を培う観点から，大学在学中の福祉体験，ボランティア体

験，自然体験等を奨励するため，教職課程に選択科目を開設することなども含め，大学による適切な配慮が求められる」と指摘している。東京都教育委員会は，教員養成課程を有する大学に対し，より実践的指導力を高めるための小学校教員養成課程のカリキュラムを提示し，「自然体験，社会体験等を通して，児童に学校の学習と社会とを関連付けたり，将来を考えさせたりする具体的な指導方法を実践事例から学ぶ」ことを求めている⁴⁾。また，文部科学省が提示する「初任者研修」でも，校外学習の研修例の一つとして「自然体験にかかわる研修」が示されている⁵⁾。このように，我が国の教員養成においては，養成や初任の段階で自然体験活動や野外活動に関する講義や実習を積極的に導入することが求められている。

現在，教員養成課程を有する大学は598校（平成22年5月1日現在）あり，大学の約8割が教員養成を行っている状況にある⁶⁾。そのうち，教員養成課程のカリキュラムに自然体験活動を取り入れている大学の数は不明であるが，教員養成課程における自然体験活動の実践事例⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾やカリキュラムに関する研究¹³⁾¹⁴⁾，教員に求められる自然体験活動の資質能力に関する研究³⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾は数多く報告されており，その意義や重要性については明らかにされつつある。しかし，これらの先行研究では，教員の専門性や指導力を高める方法のひとつとして，教員養成課程に自然体験活動を導入したことで，教職志望学生の自然体験活動の指導力にどのような教育効果があったのかについては明らかにされていない。

そこで，本研究は，教員養成課程にキャンプ体験を取り入れることにより，教職志望学生の自然体験活動の指

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

導力にどのような教育効果があるのかを明らかにすることを目的とした。さらに、このようなキャンプ体験をすることで、教職志望学生が学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力についてどのように考えるのかについても加えて検証することとした。

なお、本研究は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北海道型スポーツ振興システムの構築」（平成23年～平成25年、北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター）における健康スポーツ研究分野（自然体験活動グループ）の研究活動の一環として行い、その結果は自然体験活動指導者の養成プログラムを構築する際の基礎資料とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

本研究では、北翔大学の平成23年度「野外教育実習」に参加した151名の履修生を調査対象とした。本実習は、北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科の中学校及び高等学校教諭1種免許（保健体育）養成課程の必修科目となっている。ただし、本実習の履修生は教員養成課程を履修している学生に限られていないため、教員養成課程以外の学生も履修している。

分析対象者は、全プログラムに参加し、データの欠損がなかった120名（男子90名、女子30名／有効回答率：79.5%）のうち、教員養成課程を履修している88名（男子67名、女子21名）の履修生とした。

2. 平成23年度「野外教育実習」の概要

1) 実習の3つの目的

- ① 様々な活動や課題にグループで挑戦することで、グループにおける自分の役割を発見する力や使命感、責任感を養うとともに、社会性やコミュニケーション能力の育成、自ら主体的・積極的に行動する態度や意識をはぐくむ。

- ② 野外活動を通じて自然の素晴らしさや大切さに対する気づきを促し、環境保全意識の向上を図る。

- ③ 野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得させる。

2) プログラムと指導

本実習の実施期間は3泊4日で、主なプログラムは表1に示したとおりである。なお、履修生の人数の都合上、151名の履修生を前半（平成23年9月7日～10日）、後半（9月11日～14日）に分け、表1に示したプログラムをそれぞれ実施した。

実習期間中はすべてテント泊とし、食事の大半は野外炊事とした。本実習のメインプログラムは、2日のASE（Action Socialization Experience）と3日目の北日高岳登山となっている。実習期間中は、毎晩ふりかえりの時間を設け、その日に感じたことや気づいたことを意識化させるとともに、グループ内で気づきを共有するよう指導を行った。

班編成は、部活動や所属ゼミ、出身校が異なるように配慮し、1班8～9人の男女混合班とした。各班にはトレーニングを受けた上級学生をグループカウンセラーとして配置し、各活動や生活場面において、本実習の目的が達成されるよう適宜必要な指導を行った。

3. 調査期間及び方法

調査期間は平成23年9月7日～9月14日とし、調査方法は自記式の調査票を用いた集合法とした。測定時期は、事前（実習初日）、事後（実習最終日）の計2回とした。

表1 主なプログラムの流れ

	1日目	2日目	3日目	4日目
午前		朝のつどい 朝食（野外炊事） ASE イニシアティブゲーム ローエレメント	朝のつどい 朝食（野外炊事） 北日高岳登山	朝のつどい 朝食（弁当） テント等の撤収 マインドクロッキー グループシェア
午後	開講式 アイスブレイキング ビーイング テント等の設営 夕食（野外炊事）	↓ 昼食（おにぎり） ↓ 夕食（野外炊事）	↓ 昼食（弁当） ↓ 夕食コンテスト	昼食（弁当） 閉講式
夜	ふりかえり	ふりかえり	ふりかえり	

4. 調査内容

1) 自然体験活動の指導力

キャンプ体験による教職志望学生の自然体験活動の指導力の変容を明らかにするため、国立オリンピック記念青少年総合センター¹⁹⁾が教職志望学生を対象とした研修会の効果を測定するために作成した尺度を用いて測定を行った。

この尺度は、「集団活動やその指導の自信」(6項目)、「自然に対する理解と不測の事態への対応」(6項目)、「野外活動の技術」(3項目)、「子どもに対する接し方」(3項目)、「仲間との協力関係」(2項目)の計5因子20項目で構成されている。回答方法は、「きわめてあてはまる」、「かなりあてはまる」、「わりとあてはまる」、「すこしあてはまる」、「あてはまらない」の5件法とした。

2) 学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力に対する意識

キャンプ体験による教職志望学生の自然体験活動指導に対する意識の変容を明らかにするため、別惣ら¹⁵⁾が作成した「子どもたちの自然体験活動指導に求められる教員の資質能力」の尺度を用いて測定を行った。

この尺度は、学校教員に求められる自然体験活動指導の資質能力として、「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」(10項目)、「安全管理や安全指導の能力・知識」(8項目)、「自然体験活動に関する知識」(7項目)、「自然体験活動のための企画・指導技術」(3項目)、「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力」(6項目)、「自然体験活動への関心・意欲」(3項目)、「体力・健康」(2項目)の計7因子39項目で構成されている。回答方法は、各項目に対して「学校の授業や行事で自然体験活動を行う際、学校教員にはどのような資質能力が求められると思いますか」と尋ね、「重要である」、「少し重要である」、「どちらともいえない」、「あまり重要ではない」、「重要ではない」の5件法で回答を得ることとした。

3) 教員養成課程における自然体験活動の必要性

教員養成課程における自然体験活動の必要性について教職志望学生がどのように感じているのかを把握するため、事後調査で「教職課程において、今回の野外教育実習のような自然体験活動を行うことは必要だと思いますか」との質問を設定し、「必要だと思う」、「どちらかというとも必要だと思う」、「どちらかというとも必要だとは思わない」、「必要ないと思う」の4件法で回答を得ることとした。さらに、なぜそのように思ったのか具体的な理由に明らかにするため、その理由について自由記述で回答を得ることとした。

4) 教員になるうえで役立つと思ったこと

教員養成課程における自然体験活動の具体的な成果を

明らかにするため、事後調査で「野外教育実習の活動のなかで、教員になるうえで役立つと思ったことはありましたか」との質問を設定し、「ある」、「ない」の2件法で回答を得ることとした。さらに、その内容を具体的に明らかにするため、役立つと思った事柄について自由記述で回答を得ることとした。

5. 分析方法

「自然体験活動の指導力」や「学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力に対する意識」については、キャンプ体験前後の変容を統計的に明らかにするため、対応のあるt検定を用いて分析を行った。分析に当たっては、まず5件法で得た各項目の回答を「重要である／きわめてあてはまる」を5点～「重要ではない／あてはまらない」を1点と得点化し、因子ごとに項目の得点を合算してその項目数で除することで各因子の平均点を算出した。その後、測定段階(事前調査、事後調査)ごとに各因子の平均(M)及び標準偏差(SD)を算出し、対応のあるt検定を行った。加えて、上記の因子の得点の変容を具体的に検証するため、因子を構成する各項目についても回答の比率を測定段階ごとに算出し、比較検討を行った。

その他の質問項目については単純集計で回答の割合を算出し、自由記述については必要に応じて本論文に記載した。

なお、統計処理はSPSS statistics 19を用いて行った。

IV. 結果

1. 自然体験活動の指導力の変容

キャンプ体験による自然体験活動の指導力の変容を明らかにするため、キャンプ体験前後で対応のあるt検定を行った。その結果は、表2に示したとおりである。

分析の結果、自然体験活動の指導力に関する全ての因子において0.1%水準で有意差が認められた。そこで、各因子のキャンプ体験前後の得点差をみると、最も得点差が大きかった因子は「野外活動の技術」で1.19点の向上が見られ、次いで「集団活動やその指導の自信」(0.84点向上)、「自然に対する理解と不測の事態への対応」(0.77点向上)の順となっていた。また、測定時期ごとに各因子の得点を比較すると、事前・事後ともに「仲間との協力関係」因子が最も高くなっていた。

次に、各因子の変容を具体的に検証するため、各項目の「あてはまる」(「きわめてあてはまる」+「かなりあてはまる」)の割合をキャンプ体験前と後で集計し、比較した。その結果は、表3に示したとおりである。

集計の結果、キャンプ体験前後で「あてはまる」の割

合が最も向上した項目は、「野外活動の技術」因子の「野外での火起こしや炊事の技術や知識に自信がある」で50.0ポイントの向上が見られ、次いで「集団活動やその指導の自信」因子の「集団宿泊研修の意義が理解できる」(46.6ポイント向上)、「仲間との協力関係」因子の「子どもに適切な生活や活動等の指導ができる」(42.0ポイント向上)の順となっていた。また、測定時期ごとに各項目の「あてはまる」の割合を比較すると、事前・事後ともに「仲間との協力関係」因子の「仲間と協力した活動を通じて様々なことが得られる」が最も高くなっていた。

表2 教職志望学生の自然体験活動の指導力の変容(因子別)

因子名	事前		事後		t 値
	M	SD	M	SD	
集団活動やその指導の自信	2.86	0.66	3.70	0.72	-11.91***
自然に対する理解と不測の事態への対応	2.58	0.60	3.35	0.80	-10.31***
野外活動の技術	1.94	0.78	3.13	0.87	-12.58***
子どもに対する接し方	3.70	0.93	4.21	0.82	-6.10***
仲間との協力関係	3.95	0.86	4.71	0.52	-8.67***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表3 教職志望学生の自然体験活動の指導力の変容(項目別)

項目	①事前調査	②事後調査	②-①差
集団活動やその指導の自信(6項目)			
人前で自分の意見をはっきり言える	20.4	54.5	34.1
集団にゲームなどの指導をするのが得意である	6.8	35.2	28.4
道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	9.1	42.1	33.0
集団宿泊研修の意義が理解できる	23.9	70.5	46.6
自分の技能や知識を他人のために役立てたい	47.7	76.1	28.4
子どもの考え方や感じ方が理解できる	34.1	63.7	29.6
自然に対する理解と不測の事態への対応(6項目)			
突発的な事柄にも落ち着いて対応できる	22.8	50.0	27.2
キャンプ生活で予想される危険をたくさんあげることができる	5.6	42.1	36.5
環境教育や自然教育についての知識に自信がある	2.3	26.1	23.8
自然の中では天候が急に変化した場合のことを常に考えて行動している	23.9	64.8	40.9
虫や動物についての知識に自信がある	6.8	20.5	13.7
天候変動に柔軟に対応できる	23.8	60.2	36.4
野外活動の技術(3項目)			
キャンプの技術や知識に自信がある	6.8	21.6	14.8
登山の技術や知識に自信がある	3.4	25.0	21.6
野外での火起こしや炊事の技術や知識に自信がある	12.5	62.5	50.0
子どもに対する接し方(3項目)			
どんな子どもにも気軽に話ができる	63.7	79.5	15.8
子どもの遊び相手が得意である	62.5	79.5	17.0
子どもの意見をよく聞いて話し相手になることができる	57.9	81.8	23.9
仲間との協力関係(2項目)			
子どもに適切な生活や活動等の指導ができる	14.8	56.8	42.0
仲間と協力した活動を通じて様々なことが得られる	69.3	96.6	27.3

2. 学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力に対する意識の変容

キャンプ体験による教職志望学生の自然体験活動指導に対する意識の変容を明らかにするため、キャンプ体験前後で対応のあるt検定を行った。その結果は、表4に

示したとおりである。

分析の結果、「安全管理や安全指導の能力・知識」因子を除く全ての因子に有意差が認められ、0.1%水準で有意差が認められた因子は「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」、「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力」、「自然体験活動への関心・意欲」であった。次に、1%水準で有意差が認められた因子は「自然体験活動のための企画・指導技術」、5%水準で有意差が認められた因子は「自然体験活動に関する知識」、「体力・健康」であった。そこで、各因子のキャンプ体験前後の得点差をみると、最も得点差が大きかった因子は「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力」と「自然体験活動への関心・意欲」でともに0.25点の向上が見られ、次いで「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」(0.18点向上)となっていた。また、測定時期ごとに各因子の得点を比較すると、事前・事後ともに「安全管理や安全指導の能力・知識」因子が最も高くなっていた。

次に、各因子の変容を具体的に検証するため、各項目の「重要である」の割合をキャンプ体験前後で集計し、比較した。その結果は、表5に示したとおりである。

集計の結果、キャンプ体験前後で「重要である」の割合が最も向上した項目は、「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」因子の「計画どおりに進まなかった際の判断力」で25.0ポイントの向上が見られ、次いで「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力」因子の「プログラムの企画段階で状況の変化を予測する能力」(23.8ポイント向上)、「自然体験活動への関心・意欲」因子の「自然体験活動への情熱」(22.8ポイント向上)の順となっていた。また、測定時期ごとに各項目の「重要である」の割合を比較すると、事前調査では「安全管理や安全指導の能力・知識」因子の「子どもへの安全指導の能力」が最も高く、事後調査では「安全管理や安全指導の能力・知識」因子の「子どもが危険な場面、事故等に遭遇した場合の対応能力」となっていた。

表4 学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力に対する意識の変容(因子別)

因子名	事前調査		事後調査		t 値
	M	SD	M	SD	
自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力	4.52	0.53	4.70	0.40	-4.00***
安全管理や安全指導の能力・知識	4.76	0.41	4.78	0.37	-0.49
自然体験活動に関する知識	4.44	0.61	4.58	0.50	-2.48*
自然体験活動のための企画・指導技術	4.46	0.65	4.66	0.45	-3.21**
プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力	4.48	0.47	4.73	0.33	-5.27***
自然体験活動への関心・意欲	4.44	0.54	4.69	0.45	-5.20***
体力・健康	4.55	0.58	4.69	0.45	-2.25*

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表5 学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力に対する意識の変容 (項目別)

項目	①事前調査	②事後調査	②-①差
自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力 (10項目)			
子どもの指導への意欲・主体性	61.4	71.6	10.2
子どもへの指導に関する知識	71.6	75.0	3.4
社会教育の目的・意義の認識	63.6	64.8	1.2
子どもに生活習慣, 社会的ルールを指導する能力	58.0	72.7	14.7
子どもの自然体験活動に対する意義と価値の理解	50.0	64.8	14.8
参加する子どもたちをまとめる能力	75.0	83.0	8.0
自然体験活動プログラムの企画・運営に対する教員間の共通理解	55.7	78.4	22.7
計画どおりに進まなかった際の判断力	59.1	84.1	25.0
子どもたちを自主的に行動できるように促す能力	62.5	76.1	13.6
目標達成のための連絡調整能力	60.2	73.9	13.7
安全管理や安全指導の能力・知識 (8項目)			
子どもへの安全指導の能力	88.6	89.8	1.2
子どもが危険な場面, 事故等に遭遇した場合の対応能力	87.5	90.9	3.4
教員自らの野外活動, 応急処置に関する基礎的な技術	77.3	73.9	-3.4
教員自らが健康管理ができること	80.7	78.4	-2.3
子どもの心をケアする能力	70.5	75.0	4.5
子どもの安全・保健面における判断力	81.8	83.0	1.2
事故等への応急処置に関する知識	79.5	80.7	1.2
一般社会人としてのマナーと常識をもつこと	77.3	76.1	-1.2
自然体験活動に関する知識 (7項目)			
教員自身に自然観察や野外活動等の経験があること	65.9	68.2	2.3
自然環境の保全と活用に関する知識	53.4	63.6	10.2
動植物, 森林等の自然に関する知識	45.5	48.9	3.4
子どもの自然観察・自然理解を指導する技術	50.0	67.0	17.0
野外活動に関する知識	63.6	79.5	15.9
自然体験活動を実施する場(海・山)の知識	71.6	63.6	-8.0
自然の中から情報を読み取る能力	60.2	65.9	5.7
自然体験活動のための企画・指導技術 (3項目)			
子どもにレクリエーションやゲーム等を指導する技術	52.3	71.6	19.3
子どもに野外活動を指導する能力	70.5	70.5	0.0
自然体験活動プログラムを企画・開発する能力	56.8	67.0	10.2
プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力 (6項目)			
活動に協力してもらう人々との対人関係づくり能力	60.2	81.8	21.6
人権に配慮し, 言葉遣いが正確で丁寧であること	50.0	58.0	8.0
危機的状況に対する対応を予見しながらプログラムを推進する能力	71.6	84.1	12.5
教員の性格が明るいこと	59.1	78.4	19.3
参加する子どもたちの相互人間関係づくりを支援する能力	65.9	80.7	14.8
プログラムの企画段階で状況の変化を予見する能力	52.3	76.1	23.8
自然体験活動への関心・意欲 (3項目)			
自然体験活動への情熱	38.6	61.4	22.8
自然体験を教員自らが楽しめる感覚, 構え	63.6	85.2	21.6
教員自身が自然に関する興味・関心をもつこと	70.5	79.5	9.0
体力・健康 (2項目)			
教員自身に体力があること	52.3	62.5	10.2
教員自身が元気であること	80.7	88.6	7.9

3. 教員養成課程における自然体験活動の必要性

事後調査で教員養成課程における自然体験活動の必要性について尋ねたところ、「必要だと思う」と回答した教職志望学生は97.7%となっており、ほぼ全員が教員養成課程において自然体験活動が必要だと感じていることが分かった(図1)。

そこで、なぜ教員養成課程に自然体験活動が必要だと思うのか、その理由について尋ねたところ、「教員になった際、野外活動の経験が不足だと生徒達に指導すること

ができないと思うから。」「自分自身が体験していなければ、生徒に適切なアドバイスができないと感じたから。」「子ども達に自然の大切さや危険を知ってもらうためには、まずは自分自身が体験しておく必要があると思ったから。」「将来、勤務した学校でキャンプがなくても、遠足などの野外活動でも生かせる部分があると思ったから。」「生徒と良い人間関係を築くためには学ぶ側の気持ちを理解していないといけないと思うので、教員になるうえで両方の気持ちを知ることが大切だと思ったから。」といった将来の生徒指導に関する意見が多数挙げられていた。また、「自然という非日常的な環境で自分のことを見つめ直すことで、自分の持っていた良い部分や知らなかった一面を見つけることができたから。」「行く前と行った後では、自然体験や集団生活に対する気持ちが変わったから。」「普段できないことを実習で経験することで、今までより考える視野が広がったから。」「カウンセラーの姿を見ていたら、自分もいつかは教える側に立つんだという意識が高まり、教員を目指していく上で大切な感情を学ぶことができたから。」といった自分自身の成長に関する意見も見られた。

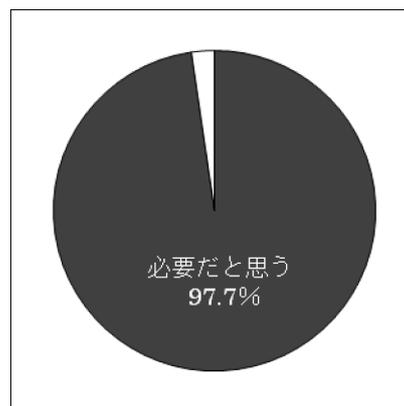


図1 教員養成課程における自然体験活動の必要性

4. 教員になるうえで役立つと思ったこと

キャンプ体験の中で教員になるうえで役立つと思ったことの有無について尋ねたところ、「ある」と回答した教職志望学生は97.7%となっており、ほぼ全員がキャンプ体験は教員になるうえで役立つと感じていることが分かった(図2)。

そこで、役立つと思った理由を具体的に尋ねたところ、「カウンセラーやスタッフのアドバイスを聞いて、このように言ったら生徒達が考えやすいのだなということが勉強になった。」「カウンセラーの人たちを見て、細かい所まで見ながら指導しなくてはならないと改めて思った。」「スタッフを見て、スケジュールやゲームの内容など何か説明をする際に分かりやすく話せることが大事だと思った。」「もし自分がカウンセラーだったらと考

えながら班のメンバーの個性や行動を見ていたら、一人ひとりの良い部分が見えてきた。こういう“目”は、教員になった時にとても役立つと思った。」などカウンセラーやスタッフからの学んだことが多数挙げられていた。また、「様々な人とコミュニケーションを取ったり、危険を予知して安全に活動できるように意識したりすることは、教員が生徒を指導する時に大切だと思った。」「自分が教員という立場として答えを言うのではなく、ちょっとしたキッカケを与え、班員のみんなで考えさせたりすることが役立つなと思った。」「教えるばかりでなく、気づかせる指導も重要であると思った。」「ASEのようなことを取り入れると生徒同士のコミュニケーションが高まり、普通の授業でも楽しく授業ができると思った。」「キャンプで料理をする際、火をつけたり、料理を作ったりすることを教えられるようになったと思った。」など指導法に関する学びについての意見が挙げられていた。

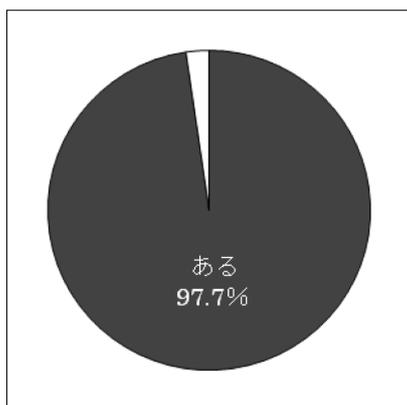


図2 教員になるうえで役立つと思ったこと

V. 考 察

本研究は、教員養成課程にキャンプ体験を取り入れることにより、教職志望学生の自然体験活動の指導力にどのような教育効果があるのかを明らかにすることを目的にし、さらに、このようなキャンプ体験をすることで、教職志望学生が学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力についてどのように考えるのかについても加えて検証することとした。

その結果、自然体験活動の指導力の変容については、「集団活動やその指導の自信」、「自然に対する理解と不測の事態への対応」、「野外活動の技術」、「子どもに対する接し方」、「仲間との協力関係」のすべての因子に有意な向上が認められた。このことから、教員養成課程におけるキャンプ体験は教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果があることが明らかとなった。

このうち、最も大きな向上が見られたのは「野外活動の技術」であった。しかし、この因子は、事前調査、事後調査ともに他の因子より低い値を示していた。実習に参加した教職志望学生に教員養成課程における自然体験活動の必要性について尋ねたところ、「教員になった際、野外活動の経験が不足だと生徒達に指導することができないと思うから。」「自分自身が体験していなければ、生徒に適切なアドバイスができないと感じたから。」といった意見が挙げられていた。つまり、本研究における「野外活動の技術」の得点の低さは、昨今指摘されている教職志望学生の生活体験の不足が如実に表れた結果ではないかと推察される。しかし、キャンプ体験によって「野外活動の技術」に大きな向上効果が見られたことから、教員養成課程においてキャンプ体験を実施することは、教職志望学生の生活体験不足を補完するとともに、教員として自然体験活動の指導力を向上させる貴重な機会になっていると考える。

そこで、キャンプ体験前後の指導力の変容を項目ごとにみても、最も変化が大きかった項目は「野外での火起こしや炊事の技術や知識に自信がある」で、「あてはまる」と回答した学生は、キャンプ前は1割強だったのに対し、キャンプ後は6割強になっていた。つまり、自然体験活動の指導力の中でも、野外炊事の指導については、半数以上の教職志望学生が自信を持てるようになったことが分かった。今回の実習は「野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得させる」ことをねらいのひとつとしていた。そのため、食事の大半は野外炊事となっており、繰り返し野外炊事を経験したことにより、野外炊事の指導に対して自信を持つことができたのではないかと考える。このように火起こしや炊事の技術に自信を持てたことは、教員の自然体験活動の指導力を養う上で大きな成果だと言える。なぜなら、学校でキャンプなどの集団宿泊活動を行う際、自然体験活動の定番として野外炊事を取り入れる学校は多い。そのため、教員として野外炊事の指導に対して自信を身につけておくことは、今後の教育活動や指導に対する自信にもつながるものと考えられる。

野外炊事の指導以外にも、キャンプ後に「子どもに適切な生活や活動等の指導ができる」や「集団宿泊研修の意義が理解できる」ようになったと感じている学生が4割以上いることも分かった。教員になるうえで役立つと思ったことについて尋ねたところ、「カウンセラーやスタッフのアドバイスを聞いて、このように言ったら生徒達が考えやすいのだなということが勉強になった。」「自分が教員という立場として答えを言うのではなく、ちょっとしたキッカケを与え、班員のみんなで考えさせたりすることが役立つなと思った。」といったことが挙

げられていた。このように、教員養成課程にキャンプ体験を導入することは、教職志望学生が自然体験活動の知識や技術に自信を持てるようになるだけでなく、自らの体験を通して体験活動の意義を理解するとともに、新たな生徒指導法を学ぶ貴重な機会となっていると言える。

次に、学校教員に求められる自然体験活動指導の資質・能力に対する意識の変容については、「安全管理や安全指導の能力・知識」を除く全ての因子に有意な向上が認められた。このことから、教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があることが明らかとなった。

キャンプ体験によって、大きな向上が見られたのは「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」や「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係力」、「自然体験活動への関心・意欲」であった。そこで、キャンプ体験前後の意識の変容を項目ごとにみたところ、教員が自然体験活動の指導をする際には「計画どおりに進まなかった際の判断力」や「プログラムの企画段階で状況の変化を予測する能力」、「自然体験活動への情熱」といった資質能力が重要だと感じた学生が多いことが分かった。

キャンプは人が制御できない自然環境の中で行われるため、時として荒天等によって活動内容や時間、場所の変更や調整を余儀なくされることがある。そのため、企画段階である程度の気象の変化を予測するとともに、予め荒天時の対応（代替活動、場所・時間調整等）を考え、状況に応じて指導者が瞬時に的確な判断を下せるようにしておかなければならない。今回の実習でも、雨天によっていくつかの活動が変更になることがあった。その際、カウンセラーやスタッフは臨機応変にキャンパーに的確な指示を出し、プログラムの進行や活動の指導を行っていた。組織キャンプにおいて、寝食を共にしながらプログラムの指導と生活の援助を行うカウンセラーは、キャンパーに大きな影響を与えていると言われている²⁰。そのため、このようなカウンセラーやスタッフの的確な動きを見たことで、自分たちが教員になって自然体験活動を指導する際には、計画どおりに進まなかった際の判断力や状況の変化を予測する能力が必要だと感じたのではないかと推察される。

なお、「安全管理や安全指導の能力・知識」については有意な向上は見られなかったが、事前調査、事後調査ともに他の因子に比べて高い値を示していた。近年、学校教育に限らず、様々な場面で子どもの安全管理、安全教育の重要性が指摘されている。そのため、「安全管理や安全指導の能力・知識」については、学校の授業や行事で自然体験活動を行う、行わないにかかわらず、教員

の資質能力としてそもそも重要性であると認識されていたのではないかと推察される。また、北翔大学では、野外教育実習のほか野外教育に関する科目が6科目あり、特に基礎科目となる「野外教育論」は「野外教育実習」と同時期開講の学科必修として展開され、その中で安全教育が徹底されており、その点も大きく影響しているのではないかと考える。この2点により「安全管理や安全指導の能力・知識」については、キャンプ体験によって大きな変化が見られなかったのではないかと推察される。

VI. 結 論

本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- ① 教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果があり、その効果は「野外活動の技術」に顕著に見られた。
- ② 教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があり、教員が自然体験活動を指導するためには、計画どおりに進まなかった際の判断力や状況の変化を予測する能力が必要だと感じている教職志望学生が多かった。

本研究の結果より、教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果や教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があることが明らかになった。しかし、ここで特筆すべき点は、教職志望学生の自然体験活動の指導力の向上にカウンセラーやスタッフの存在が大きな影響を及ぼしている点である。

これまで、キャンプ体験における教育効果の検証においては、主としてプログラム（期間、環境、季節等）やアクティビティ（冒険教育、環境教育、ふりかえり等）による効果の違いに着目した研究が多く、カウンセラーの資質能力に着目し、教育効果の差異を検証した研究は数少ない。教師という指導者を目指す教職志望学生にとって、カウンセラーは指導者としての身近なロールモデルになるため、その影響が強いことは大いに予想される。そのため、今後は、本研究の成果を踏まえ、教職志望学生の自然体験活動の指導力の向上要因について検証をしていくことが必要だと考える。

付 記

本研究は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北海道型スポーツ振興システムの構築」（平成23年～平成25年）の助成を受けて実施したものである。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課：自然体験活動指導者養成事業。文部科学省，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/taiken/1282647.htm：2012年3月20日閲覧。
- 2) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議：青少年の野外教育の充実について（報告）。青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議：p14, 1996.
- 3) 別惣淳二，千駄忠至，嶋崎博嗣：自然体験活動の指導で求められる教師の資質能力に関する一考察（Ⅱ）－1学期と2学期における子どもの活動の成果との関連に着目して－。兵庫教育大学研究紀要，第31巻：pp23-31, 2007.
- 4) 東京都教育委員会：小学校教諭教職課程カリキュラムについて 解説編。東京都教育委員会：p13, 2010.
- 5) 文部科学省初等中等教育局教職員課：初任者研修。文部科学省，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/1244828.htm：2012年3月20日閲覧。
- 6) 文部科学省初等中等教育局教職員課：平成22年5月1日現在の免許状の種類別の認定課程を有する大学等数。文部科学省，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/index.htm：2012年3月20日閲覧。
- 7) 濁川明男，柴田好章：教員養成課程における体験学習の意義－自然体験実習の試みを通して－。上越教育大学研究紀要，第18巻第1号：pp91-103, 1998.
- 8) 石原敏秀，山崎旭男，出羽京子：教員養成系大学における野外教育の試み。岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要，第1号：pp193-204, 2001.
- 9) 河合信行：教職を意識したキャンプ実習の一考察。太成学院大学紀要，11巻：pp217-223, 2009.
- 10) 西島大祐：キャンプ実習に関する意識調査－教員養成系大学カリキュラムにおける授業実践を通して－。鎌倉女子大学紀要，第16号：pp79-86, 2009.
- 11) 豊澤弘伸，狩野克彦，松浦光和：教員養成における「体験」活動に関する一考察。宮城学院女子大学発達科学研究，No10，：pp19-28, 2010.
- 12) 粥川道子，杉岡品子，青木康太郎：教員養成課程における「野外教育実習」の実践報告。北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要，第2号：pp77-90, 2011.
- 13) 別惣淳二，長澤憲保，上西一郎：自然体験活動を通して新しい教員の資質能力形成をめざすカリキュラム開発（多様な教育実践の探究）。教科教育学研究第21号：pp197-214, 2003.
- 14) 岡村泰斗，中川もも，米山絵里，荒木恵理：教員養成系大学における野外教育指導者養成カリキュラムのあり方。奈良教育大学紀要，第53巻第1号：pp73-82, 2004.
- 15) 別惣淳二，長澤憲保，上西一郎，一山秀樹：自然体験活動指導に求められる教員の資質能力に関する調査研究。学校教育研究，第15巻：pp1-12, 2003.
- 16) 上西一郎：平成14年度兵庫教育大学プロジェクト研究 子どもの自然体験活動の指導に求められる学校教員の資質能力形成に関する研究 研究報告書（第一年次），上西一郎：2003.
- 17) 長澤憲保：平成15年度兵庫教育大学プロジェクト研究 子どもの自然体験活動の指導に求められる学校教員の資質能力形成に関する研究 研究報告書（第二年次），長澤憲保：2004.
- 18) 長澤憲保：平成16年度兵庫教育大学プロジェクト研究 子どもの自然体験活動の指導に求められる学校教員の資質能力形成に関する研究 研究報告書（第三年次），長澤憲保：2005.
- 19) 国立オリンピック記念青少年総合センター：事業効果測定のための調査票とその利用方法－主催事業評価の一方法としての参加者の変容測定方法の開発に関する調査研究報告書－，国立オリンピック記念青少年総合センター：pp46-51, 2001.
- 20) 高瀬宏樹：2. 組織キャンプにおける指導者（スタッフ）の役割。星野敏男，金子正和監修 野外教育入門シリーズ第1巻 野外教育の理論と実践。pp38-39, 杏林書院，東京，2011.